宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊 26番
定価 一年 送料共500円

宗像大社御用達
装束神具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

晴天に恵まれた新年祭

夜をこめて初詣する車の灯
もずまず止まれ流れる光は参道

交錯するライトの饗宴

大晦日の午後五時に「大祓式」が斎行され、続いて午後六時に「除夜祭」が斎行された。穏やかな暖かい年末であった。

午後十一時、今迄静かだった境内が急に賑やかになった。轟々と聞える自動車のエンジンの響きである。数名の警官と十二名の消防団員が赤ランプを持って交通整理に廻り廻っている。

御祖内の拝殿の両側の空地には赤々と庭燎が燃えている。零時になってから直ちに元旦詣でをしようとしているのであろう。沢山の人々が火に手をかざして待っていた。

祈願受付所のスピーカーが祈願者昇殿の案内をはじめた。

零時、第一回目の祈願申込者がどっと殿内に殿した。十七名の神職と十八名の巫女さんたちが活動開始。ひっきり無しに鳴る拝殿の太鼓の響き、五百台収容できる駐車場を埋めて後から後へとつめかける大小車輌の轟音、毎年のことながら繰り返される宗像の社頭風景であった。

逃がすまいと心得る。弟子が真に有形無形の教えのすべてを身につけてくれるは、師匠たるものへ満足この上もない。良き後継者を得た喜悦は千金に値するものがあろう。敬えて優れた門下の名声の陰に、その存在が消えうすれて、名もなき当の師匠となり終ることに限りなき満足感さえあろう。

この不肖の師匠の喜びを遺してあげる祈願感謝の心構えが肝心の問題である。たゞ偶然が幸いしたり、表面だけの要領のよさだけで、優れた地位に浮び上ったとしても、それは真に不肖の師匠たる弟子が師父にまさる人物となった時である。人の親たる者師たる者、いづれの場合も不肖の評を得たいものである。それは相撲道の「恩返し」なる一言が、よくその構えの核心は、これを知りこれを踏まえ」の二義を知り礼節を正す実践することである。

仁義礼節といえば、古くさい言葉のように聞えるが、これを外にしては修練精進も実は結ばない。親の事業を継承して、父祖以上の大事を成し遂げる者の心構えも亦同様に、親の恩を知ることにあける。

瓜の蔓に茄子はなる。仁義礼節を見ることが茄子となる第一歩である。不肖の師父に甘んじて、ひそかに喜ぶ師父があれば、その子弟門下が師父にまさる人物となった時である。人の親たる者師たる者、いづれの場合も不肖の評を得る。

東郷少年剣友会発会

一月二十三日宗像町東郷小学校に於て発会式を行った。会員九十名。指導は東郷在住の有段者。当社より剣道部少年十三名がお祝いに参加して模範稽古を行った。郡内少年育成のため、此の種の企画が発展することを望む。

宝物館賑わう！

今年の参拝者の特徴は、概して服装がきちんとしており、態度に敬虔さが感じられる点であった。世相が安定し、人心が落ち着きを得る様になってから、毎年の初詣でが殖んになって行くこの事実に、日本人の在り方を考えさせられる何ものかがあるのではなかろうか。

既報の通り、宗像大社宝物館は昨年十一月二十九日落成開館式を行い、本年元旦より一般公開を行ったが、元旦早々大変な賑わいを呈した。この一カ月間拝観者も三千名をこえ、特に報道機関の人気が集中し、NHKテレビを初め各社の取材合戦が行なわれた。

また当宝物館は現在殿備の良きでは日本一の折紙を文化財保護委員会から頂いた建物であり、各地から建築様式の視察や、問合せが殺到し、係員は説明に追われている。

しかし未だ開館当初であり、館内の整理、其他の都合上、週二回火曜、金曜を休館にしているが、それを知らずに来館される方が多数あるので、この紙上を通じて今一度左記の通りお知らせを致します。

記

宝物館開館時間
午前十時より午後四時迄
休館日、金曜日　休館
但し祝祭日の場合は開館

阿蒙少言

本日休診は医者のスト。桑田変じて蒼海ともなる世の中なれば、仁術消えて殺術が出ても不思議はあるまい。私は患者が心配だが医師会の申合せを破るわけにもゆかぬと、異口同音。スト賛成者がなくてストがあり、平和論者ばかりだった日本に戦争があった。忍者の謎は仁者では解けぬ○「先生風邪をひきました」「若いのだ、冷水摩擦をやれば治る」「先生、この悩みどうしましょう」「若いのだ、吐き出してしまえば解消だ」一〇夫婦喧嘩の仲裁にいる。犬も喰わぬ勝負の行司役、最常の軍配では容易にケリがつかない「奥さん、喜びなさい、日本中の女性が誰一人として好感を持たぬような男子は、安心が出来ない。外で持てるような劣れた男子を夫に持った幸福をお考えなさい」と言ってやったが、仲よく連ばれた二人三脚。あらゆる結婚が男女の調解から成立しているのだから、調子の乱れは時折の余興、犬も喰いたくないだろう○職場で自分が最も劣れた手腕の持主の如く家庭で自慢する。利巧な細君もいつしか他に吹聴したり亭主の同僚や後輩を軽んずる態度をとるようになる。原水の連鎖反応は恐しい。これが病になって身にこたえまさに膏肓に入る。骨の硬くなないうちに治療が大切でござる○中国の広東地方では、犬や猫を籠に入れて市場に出す。中国人はうまそうな猫だなど話しながら品定めをする。笑ってはいけない。蛸を好んで食っているのはどこの国民か。一概に他人はけなされまい○広東といえばあの地方に居た陳家さんに、度々慰問袋を送った主が花子さん。帰国して会ったら花子さんは六十の婆さん。「名は体をあらわさず」それが苦笑の因。

（白雲）

第四十六回 宗像大社献詠歌会詠草

一月十日　於社務所　詠草到着順

歳末のネオンの冷えそびらにて屋台の饂飩をわが食して居り　香椎　桜井　秀

歳末の貌をしてる君もまた地下室売場にもまわつをり　香椎　桜井　ツ子

戸畑　伊規須ゆき

神亀五年七月二十二日の憶良を偲び嘉摩（現嘉穂郡）の野を行く　宮田　片山　朝子

拓きたる山の端の辺に棒条が煙昇れり朝光る朝　名残　竹原　円

暮れはて人の姿も見えぬ田に野扱きの音はいまだ聞ゆる　勝浦　永島　計七

久々に通る団地に家増して都めきたる往還飾りせるも　田熊　小野角次郎

山茶花の白の八重咲く狭庭には松横斜下に石燈籠あり　〃　小野　花居

朝まだき小鳥のさえづりはづみをり小春日つづく暮の連日　吉留　白木うめの

登る程に雑念去りて念仏の声に御山の浄気漂たり　若松　大高　岩吉

三十九年身きに思うき暮けり来る新玉に幸を祈らん　大井　安部　重郎

年輪を積みたる巨木亭々と天摩す尊を見上げては撫す　〃　安部　静子

年の瀬の忙しき心忘ること水仙の花は清く咲くも　〃　吉田　杏子

米つくる業も何時しか身につきて十年は過ぎぬ彩の如くに　江口　辻野　開造

何もせで年を送りて悔多く来る年こそと心はすまず　門司　永島　哲夫

対岸に並立つ石油タンク群陽にかがやけり初暖の朝　陵厳寺　真鍋　万三

若きより歌はなるぬ此の吾が神のめぐみに来春迎へる　勝浦　永島　意之助

こともなく越えて嬉しや米の坂をぞろ登らん東の吉山　吉留　山下　しづえ

愛の糸繰りつゝ祝ふ誕生日友の子の手はまろく逞し

（三頁へつゞく）

論説　不肖の師匠

相撲界に「恩返し」という言葉がある。勿論世間一般にある様に、恩義を受けた師匠や同門の先輩達に、立派な力士になって恩返しをすることも意味していようが、特に稽古をつけ指導してくれた上位力士に、晴れの土俵所の土俵上で勝つことを指している。なえ方と自負する一部の軽薄な現代人が、恩師先輩の恩義を思わず、その苦心の薬綿と愛情の鞭撻を学ばずして、表面だけの名声を安直に獲得しようとする傾向は、道の堕落に外ならぬ。

学問芸術宗教は勿論武道にそれ一道に秀でることは、容易ならぬ心構えを必要とする。進歩した考えを以て見せる力士道の恩返しは良い味を持つ。恩返しは恩義に発し、恩義を受けた師匠先輩の恩義に報いるの心構えに、立派な力士になって恩返しをすることも意味していようが、特に稽古をつけ指導してくれた上位力士に、晴れの土俵所の土俵上で勝つことを指している。なえ方と自負する一部の軽薄な現代人が、恩師先輩の恩義を思わず、その苦心の薬綿と愛情の鞭撻を学ばずして、表面だけの名声を安直に獲得しようとする傾向は、道の堕落に外ならぬ。

厳しい規制の中に錬磨を薬ねて人格形成と価れる、とも見られるが、肉親の愛も一遊事情する情も決して無能の後継者を望むものではない。我が子も門下も自分以上の人物になってもらいたいと念願するのが、人情の自然である。

然し、瓜の蔓には茄子はならぬ、蛙の子は蛙の子と云う。瓜の蔓に瓜がなり、蛙の子が蛙になるのは当然の成りゆきだが、鳶の子が鷹に優れた人材がなく、二代目の傑物が続かないのが通例である。不肖の子を生みたくないと同様に、不肖の弟子の輩出を一遊の達人は最も嘆いたことであろう。無能の子孫という比較対照物があってこそ、その親が光り、多くの凡庸の弟子があってこそ、その師匠が達人の域と自負されると、親の業績を相承する意向が強くなり、漸く一芸を身につけたと自負すれば、師匠の鞭撻を厄介視する風潮が見られる。情義を無視した功利的な自信過剰は、蛙の子鳶の子にさえなり得ないものが多かろう。

芸道にしても、何とかして道の奥義を極めたいとの強烈な意志があれば、師匠の持っているすべてを学び取ろうとし、師匠の日常の心構えは一言一遊退って師の影をそれ傑出の人物が現れて、一遊の夢に瓜がなり、蛙の子が蛙になる踏まず」の二義を知り礼節を正すことにつきる。一遊を志す者の心構えの核心は、これを知りこれを実践することである。

この小論の趣意は、月給を貰うために教育を切り売りしているのだと放言する先生や、俺たちの授業料が先生を養っているのだと呼号する学徒には、解し難いことも知れない。導く者に愛情がない教育はやがて底詰る。物質文化にあやまられた技術売買の非人間的教育は、遠からず清算されるであろう。愚愛の情が人間の自然である。自然の発露にこそ永い生命がある。

第四十六回 宗像大社献詠歌会詠草

一月十日　於社務所　詠草到着順

歳末のネオンの冷えそびらにて屋台の饂飩をわが食して居り　香椎　桜井　秀

歳末の貌をしてる君もまた地下室売場にもまわつをり　香椎　桜井　ツ子

戸畑　伊規須ゆき

神亀五年七月二十二日の憶良を偲び嘉摩（現嘉穂郡）の野を行く　宮田　片山　朝子

拓きたる山の端の辺に棒条が煙昇れり朝光る朝　名残　竹原　円

暮れはて人の姿も見えぬ田に野扱きの音はいまだ聞ゆる　勝浦　永島　計七

久々に通る団地に家増して都めきたる往還飾りせるも　田熊　小野角次郎

山茶花の白の八重咲く狭庭には松横斜下に石燈籠あり　〃　小野　花居

朝まだき小鳥のさえづりはづみをり小春日つづく暮の連日　吉留　白木うめの

登る程に雑念去りて念仏の声に御山の浄気漂たり　若松　大高　岩吉

三十九年身きに思うき暮けり来る新玉に幸を祈らん　大井　安部　重郎

年輪を積みたる巨木亭々と天摩す尊を見上げては撫す　〃　安部　静子

年の瀬の忙しき心忘ること水仙の花は清く咲くも　〃　吉田　杏子

米つくる業も何時しか身につきて十年は過ぎぬ彩の如くに　江口　辻野　開造

何もせで年を送りて悔多く来る年こそと心はすまず　門司　永島　哲夫

対岸に並立つ石油タンク群陽にかがやけり初暖の朝　陵厳寺　真鍋　万三

若きより歌はなるぬ此の吾が神のめぐみに来春迎へる　勝浦　永島　意之助

こともなく越えて嬉しや米の坂をぞろ登らん東の吉山　吉留　山下　しづえ

愛の糸繰りつゝ祝ふ誕生日友の子の手はまろく逞し

（三頁へつゞく）

今年の交通安全を祈って

国鉄・西鉄・県交通安全協会等

参拝団続く！

去る一月六日、新春初詣で境内が雑踏する中を県交通安全協会一行五十余名が参拝した。

これは、参拝する事を吉例として、三十数年間続けてこられた全会の行事である。

県警関係者、陸運事務所、自動車販売業者、乗用旅客自動車協会、貨物自動車協会、自動車整備関係業者、自動車学校関係者等の代表者五十余名が拝殿に昇殿、今年の交通安全を祈った。この後、神湊、みなと荘に於て当社の接遇による祝宴を開いた。

席上協会長が立って「宗像大神の道主貴としての御性格を御理解頂き、それぞれの持ち場に於て交通安全の実を挙げられます様皆様に御願いしたい」旨挨拶が述べられた。

次に当社小野権宮司から

「今や交通安全の問題は国家、社会的な問題になっております。皆様が数十年前に安全協会を創立され、以来、毎年正月には恒例の宗像大社詣でをしておられることに対し、衷心より御礼を申し上げます。どうか宗像大神さまの御神徳のもとに、交通安全県の先達である皆様の御活躍を期待するものであります。」

右の挨拶があり、歓談に一時を過した。

この会合をすることによって、県下の安全協会全員が集合するということであった。

「宗像大社万才」

「交通安全協会万才」

が三唱され、今年も此の道の為に奮む誓いを新たにしたのであった。

これより先、元旦早朝には門司鉄道管理局長が参拝、それに続くかのように各地の国鉄関係者が参拝された。

宗像談話室　神さまと鬼准尉

看板屋のMさんがお宮に出入りする様になってから十一年目になる。額の広い大縁の眼鏡をかけたがっちりした風丰と体躯に風雪が感じられる。年令は四十八才位にもなろうか。この人がお宮関係の看板類を一手に引き受けている。そして大抵の仕事は、間に合わせる。間に合わせる、という言葉通り、いつも時間ぎりぎりに仕事を完成する。とに角間に合うので、係の職員はやきもきし乍らも、しまいにはほっとする、ということになっている。Mさんのこの要領のよさは、多分に曾ての軍隊生活の習慣に基いているものと思われる。

さて、Mさんがお宮の仕事を一手に引き受けているのには、Mさんなりの理由があった。決して「儲けづく」で仕事をしているのではないのである。

Mさんは戦時中、七年余りを南方の西部ニューギニヤで転戦した。兵科は砲兵で、あだ名が鬼准尉、連隊本部付であった。それも単なる本部付ではなかった。挺身斬込隊長要員であったという。鬼の字は彼の平常の人柄に対してついていたのではなかった。斬込隊長としてのM准尉の戦場に於ける態度に対してつけられた呼称であった。彼は戦機をつかむに妙を得ていた。いつの戦場に於ても決して退くことがなかった。飽く迄も前進を続けた。そして彼は、遂に生き残った。

或る時、彼の属する部隊九百九十名が輸送船に乗り組んだ。そして、その頃の例に違わず角雷攻撃を受けて沈没した。その時に大部分は戦死し、少数の者が漂流生活を始めた。文字通り板切れ一枚にとり縋っての漂流であった。周囲の戦友たちが次々と力尽きて波に呑まれた。中には鮫に襲われて絶命をとげた者もあった。

「あの時の血潮で染まった海の色、一生忘れられません」

そんなことをMさんに聞いたことがある。それでもMさんは死ななかった。三日三晩、意識が殆んど朦朧となったまま漂よい、これで終りだ、と思ったことが何回かあった。と、その時彼の意識の奥に「むなかたさま」「たしまさま」の神名が浮んだ。おお、故郷の氏神様だ、と思った。故郷のことが走馬燈の様に通り過ぎた。

「たしまさまのお名前が意識できる間は、この俺は大丈夫だ」

何となくそんな気がした。気がついてみると、足が無人島の珊瑚礁に触れていた。この時は二人だけが助かった。

戦斗行為を除いて、この輸送船事件を含めてMさんは五回程生死の経験をした。その度毎に「むなかたさま」が意識された。

「自分は絶対に戦死しない」

そんな自信さえ持つようになった。かくて、歴戦の勇士は奇蹟的に生還した。

戦後の世相は混乱していて、仲々まともな職業が無かった。数年間は種々雑多な仕事をした。そして間もなく、若い頃に手職をつけた看板屋をはじめることになった。この職業をはじめてからの彼は、矢張り後退を知らなかった。戦機をつかみ、飽く迄も前進する彼の姿があった。お得意が増えた。郡内の仕事は殆ど彼の掌握するところとなった。だが、金の工面は必ずしも思う様にはならなかった。

しかし彼は前進を続けた。

或る日、警察の交通係から連絡があった。お宮で仕事を頼みたいという伝言であった。戦後約十年間、忘れていた「むなかたさま」が彼の脳裡によみがえった。

「あっ、俺は最も大事なことを忘れていた」

以来、「仕事を間に合わせる」Mさんの姿が宗像大社に見られるようになった。お宮の仕事をしている事は、郡内では絶対の信用条件であった。

「むなかたさまを忘れぬ限り、私は幸福に生きて行ける、と思うようになりました」

正月十一日、折りからの雪の中をやって来たMさんがぽつりと述懐した。彼の屋号を「鳥居屋」という。

今年の干支守り〝巳〟の一刀彫り

当社で授与している一刀彫りの干支守りは素朴な中にも雅味があるとの事で好評を博している。

一昨年より始めたもので卯、辰巳と今年で三年目になるが年々希望者が増えて元旦から十日目で五百体の内残数がわずかになってしまった。

巳は陽気にして気は四月に至りて現われる象なりと云われている当社の一刀彫り〝巳〟は可愛しい顔をしている。

材質は楠で伊勢名工の手になる逸品である。

社務日誌抄

一月一日　午前六時　元旦祭斎行

門司鉄道管理局長来社。午前十時より宝物館開館、参観者すこぶる多し。

四日　新出光石油会長、出光興産福岡支店長以下十三名参拝

五日　久保宮司志賀海神社に出向。

六日　県交通安全協会三十余名参拝。

七日　西鉄ニュース編輯部員五名、宝物撮影の為来社。内閣観光政策審議会専門委員、十三名来社。

献米奉告祭

一月十三日午前十時、献米奉告祭が斎行された。旧冬、郡内の氏子から奉献された献米が本殿大床と拝殿に山積されて、実質的な収穫感謝祭が行われた。

終って、例年の通り、社務所に於て「鏡餅開き」が行われ、参列した氏子の人々と共に雑煮とぜんざいによる直会で賑わった。

きさらぎの祭

一日　月次祭　午前十時

二日　旧正月大漁祈願祭

旧暦元旦にあたって、宗像郡漁業協同組合の大漁祈願祭を行う。

三日　節分祭　午前十時

大寒が終り冬籠りの季節が過ぎて、いよいよ春の仕事の季節に入るこの時機にあたって、厄除けのお祓いをして、一年中の無事を祈る行事、この日の参拝者には大社の福豆を授与する。

節分には、古くから各家庭に於いても、福豆を撒いて「鬼は外、福は内」と唱えて、豆を撒き、自分の年だけ拾う等、各地によって種々な行事がある。

一一日　建国祭　午前十時

もとの紀元節祭。わが国の建国の起源に思いをいたし、国民としてのつとめを誓って祈る。

一五日　月次祭　午前十時

今月の交通訓

○整備欠かさず

安全運転

宗像大社　海洋神事奉賛会新年祭

十日午前十時、宗像七浦から各漁業組合長、各水難救済所長が参集して新年の初寄りが行なわれ、新年祭の後社務所に於て会合が持たれた。議題は

一、新若布献上の件

一、みあれ祭の件

一、其の他

右につき概略の打合わせが行なわれた。このうち当面の、若布を宮中に献上する件については、採取時期直前の二月初旬（旧正月）に具体的な打合わせをすることとなった。

終ってから社務所に於て宴会を行ない、去年の若布献上や御生祭等の思い出に話がはずんだ。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像四郎氏貞（二十二）

山下半可　作
福田長庵　画

前号までのあらすじ

時は戦国、防長の大守大内義隆は逸楽の生活を続け、権臣謀臣らが暗躍する。天文二十年八月二十九日、陶尾張守隆房が謀叛、遂に主君を長州深川の大寧寺に討つ。翌年の春、大寧寺の故主の墓前に髻を切って詫びる晴賢（隆房改め）の姿があった。

巷説

義隆の墓に詣でた晴賢が入道までして先君に詫びた事は忽ちにして領内に拡がった。

「さすがは陶殿」

「いや、逆心を糊塗する手段よ」

「いやいや、そういうものではない。本心からの行為じゃ」

「そうかな、防長の諸家に対する仮装ではあるまいかの」

「ああすれば申し訳というものは立つものであろうかのう」

「何れにしても謀叛を起した者が先君の墓に詫びに行くということは常識では出来ぬことじゃて」

「兎も角も、今は家中第一の実力者じゃ、うっかりした事は云うまいぞ。」

「いかにもいかにも」

「じゃが、入道全薑（晴賢）どのは、此の後どういう風に出らっしゃるかのう」

「毛利殿が沈黙しとるによって一寸気味が悪い」

「うむ、しかし新しい御主君晴英様は豊後の大友様の御舎弟様じゃ、毛利殿とて、うっかり手も出されまい。」

「成る程成る程」

「したが、先君は都ぶりを好まれ、この山口も京の都を移した様じゃというわい。戦が無いのであれば、所詮しもじもの我等には今のままの続くのがよかろうと思うが、入道殿はどのようにさっしゃるのじゃろうのう」

庶民の願いは常に「平和」であった。権力者と、その用を弁ずる商人共だけが常に甘い汁を吸っていた。上べは庶民の為、国の為と称し乍ら、何処までが真剣なのかわからない。何時の時代でもそれは変らなかった。人間は結局のところは「自分」というものを考えずに生きることが出来るものであろうか。利己ということを目標としない迄も、自分の行動を他人が見ているということを全く意識しようともせずに行動するという人は恐らく少ないであろう。晴賢の場合がそうであった。

陶全薑が入道した時の大寧寺参詣は、多分に己れの演出効果について計算していたのではなかったろうか。

氏貞入国（一）

毛利は尚もじっとしてそれを見守っていたのである。

ここ筑前の国、宗像の本城白山城に於ては、宗像の家臣らが鳩首協議を続けていた。大宮司宗像氏男が大内義隆の難に殉じた事はすぐさま伝わっていた。家臣の心配は唯一つ、宗像大宮司家の後嗣を誰にするかということであった。

今の時代では諸国の領主が欠員のままでいられる訳は無かった。そんなことは寸時たりとも有り得べからざることであった。

まだ残暑のきびしい中を石松加賀守、吉田飛騨守、占部貞安、許斐氏鏡、河津掃部允、米多比修理進らの重臣らが慌ただしく出入りしていた。ただでさえ暑いのに、宗像四ツ塚連峰の別峯にあたる白山城は右手に金山（かなやま）を控えた西向きの山懐にあるので、午後になると西日があたり、風が落ちると殊に蒸して来る。領内徳重村にある名残の城にいた良喜入道（故氏男の養父、第八十七代大宮司）もやって来た。

ここで家臣らの論議は真っ二つに割れた。

それというのは、今の宗像には大宮司職を継ぐべき適当な人物がいなかったからである。

第一は、氏男には男子が無いから、氏統の末子、つまり氏男の義弟にあたる三才になる千代松丸を立てることにし、父君の氏統を還俗して後見人に据えようとする案

第二は氏統の先代にあたる正氏（黒川隆尚同人。すでに三月四日死去）の庶子である鍋寿丸を山口から迎え入れようとする案。

以上の二案があった。第二案を支持するのは許斐、河津らの一党で彼らはこれ迄に度々山口勤番の主君に随従したことがあったので、陶尾張守の威勢の盛んなことを知っていた。

しかし、家中の二派は夫々或る抵抗を持っていた。防長の大守が弑されたあとのわが宗像党の自主性を、この際確立しなければならぬという意識がそれであった。

又、氏男の存世中から、鍋寿丸の相続した武領に対する積年の抗争があった、宗像党の中に、氏男側と鍋寿丸側との対立があり、これが今度の相続問題に当面して、それがいよいよ表面化したのであった。庶腹の鍋寿丸を迎え入れて、しかも謀叛者の陶の後塵を拝するなどは以ての外のこと、というのが反対派の感情的な論拠でもあった。

しかし、時世は宗像党の重臣らに時間的余裕を与えなかった。陶は、大内晴英の名義で黒川鍋寿丸を元の「宗像」と復姓させたのである。

（つづく）

交通安全と佐藤首相

―秘められたエピソード―

最近の新聞で首相が国電のラッシュを視察したことを読んだ。交通安全につながる遥かな昔の思い出が、彼の胸中を去来したであろうか。

昭和6年の秋、鳥栖運輸事務所の所員を引率して任務完遂を誓い祈った記念写真。
(前列中央が佐藤所長)

当社に一枚の興味深い写真が発見された。今から三十四年前の昭和六年の秋、九州筑肥地方に於て陸軍の大演習が行われた。その頃、佐賀県鳥栖の運輸事務所長をしていたのが若冠三十才にも満たぬ佐藤栄作氏であった。

大演習御統監の為に、陛下は海路軍艦にて御出でになれ、お帰りには陸路鉄道を御使用になれることになった。

ここにがその任に当る運輸事務所長の責任たるや重大である。よって所長は部下の職員を統えて宗像大社に参拝し、ひたすらに交通安全の御加護を仰いだという訳である。

今や一国の宰相としてその双肩に国事を荷う彼の、若き日の面影がこの写真である。極度の緊張感を顔面にあらわし、日夜の労苦のために深い憔悴の皺が刻まれている。

宝物館に春近し
山茶花の花開く

新年を迎えると共に開館された宝物館に、参拝を済まされた方々が境内から深い緑の小路を抜けて歩を運ぶ姿が多く見られる。暖冬の新年とは言え、吹く風は冷く導みきった青空に山茶花だけが初めて花をつけている。

山茶花は他の落葉樹の間にあって孤高の気品を保ち淡紅の花を開き、庭園に彩りを添え、拝観者の目を楽しませている。

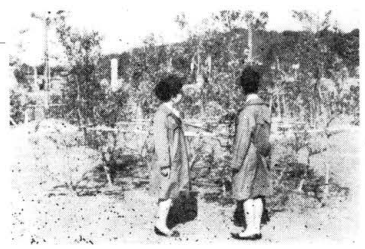
花に眺め入るガイド嬢の胸にも「冬来りなば春遠からじ」と……

満開のこの花弁が一枚一枚と散り落ちる頃、他の草木はいつしか芽吹き始めて、庭園は緑の濃淡のコントラストを描いて見せる。

白亜の直線を基調とした建物と緑の芝生、様々な草花。

春は宝物館に美しい化粧をするに違いない。

大社では、将来宝物館の前庭を落着いた名園にしたいと思っている。



(写真、上は山茶花、下は見る人)

宗像郡剣連打合せ会

去る二十四日宗像署に於て開催された。主として年間の行事予定が審議されたが、中でも、宗像大社春大祭奉納剣道大会は、四月四日の日曜日に開催することに決定した。町村、各校区、学校、団体等より沢山の団体申込みを希望するということであった。

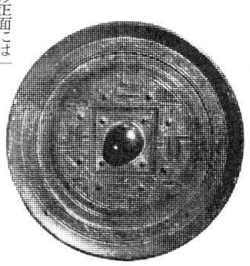
宝物を訪ねて

宗像大社宝物館が完成し、元旦から一般に公開されている。そこで本欄に於て其の解説をして大方の参考に供する次第である。

本紙創刊より一カ年に亘り「宗像大社宝物紹介」と題して既に詳解したが、参観者の切なる要望により再掲した次第である。

鏡

鏡、カガミ、神殿の正面にはこれが奉られている。三種の神器の一つである。現代っ子には三種の神器とは車、現金、etcと数え出して今日に至るのだから文化の発達と共にしづつ形を変えて来たと言える。



宗像大社宝物館に収蔵されている鏡は合計四十一面ある。勿論、海上四十九粁、かなたの神島沖の島からの発見品である。

出土品と云う言葉は実は適当でない。神様に捧げる為に上代の人々が製作して神様の岩座に奉ったものなのだ。長年月の間に塵埃が積って土に埋もれているように見えたが、元来これは置いたものなのである。大きさは直径三十糎から三糎程度のものまであって文様は一定していない。物の本によると国製鏡と云うのはメイドインジャパンの事である。舶来品は三面あって其他には見当らない。これ等の内、展観室に出品しているものは六面である。

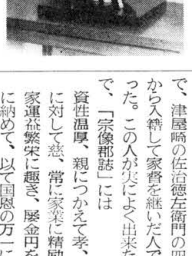
精巧の誉高いものに方形規矩鏡(ほうけいきくキョウ)と内行花紋鏡(ないこうかもんキョウ)との二面があるが、鏡のすべてが優秀である事と完全無欠なる姿をしている事は世界に比類がないと云われている

(つづく)

名匠が翁舞人形を奉納

既報の通り、博多在住の名匠小島与一氏が翁舞人形製作奉納の為参拝されたが、先般翁舞姿の人形を持参して神前に奉納された。

高さ四十五糎程の大きなもので博多人形の第一人者として知られる氏の作品の中でもの様に大型のものは数を稀しかないと云う事である。この人形は早速宝物館に運ばれ、神宝殿面の傍に置かれた。両者を一見して、翁面を着用して翁舞を演ずる処が納得されて良いと仲々好評である。



暁暗をついて
少年の寒稽古

宗像大社剣道部

第二学期の終った暮れの二十五日から恒例の剣道寒稽古が始まった。明け方の玄海小学校南校舎(田島)の講堂に明々と電燈がともり、元気な懸け声がこだました。

参加する者、小学校一年生から中学校三年生迄約三十名、それに大社の職員六名。少年たちのうち中学三年生の五人組は、つい先頃初段に合格したばかりなので特に元気が良い。

遠い所から馳つける者もあるので、稽古開始は七時。一時間余りの稽古をしたあと、面を脱いだ紅潮の頭からは湯気が立ちのぼっていた。

寒稽古は三十日迄続けられ、終りの二日間は、わざわざ東郷から郡理事長である安部七段が応援に来て下さった。

最終日は一と稽古の後で紅白試合を行った。抜きつ抜かれつ、寒稽古の成果を一ぺんに発揮して、小さい子も中学生も大奮斗。次いで中学の三年生と一年生による各五人組の対抗試合を行った。三年生は当剣道部の第一期生。何れも初段の猛者である。これに対して一年生が試合を挑んだ訳で、多分これが三年生差別の「お別れ試合」となったであろう。

試合終了後、お母さん方の御苦仕による「おしるこパーティー」が開かれた。

朝日の射し込む講堂に円座をくって、何杯もお代りをする子供たちの様子をお母さん方がにこにこと見守っていた。

あでやかな成人祭
―玄海町―

十五日午前九時、玄海町大森町長引率のもとに百二十七名が参集して、成人奉祝祭が斉行された。

男子代表の星田勝君と女子代表の日市美代子さんが恭々しく玉串を捧げ、居並んだ一同が列拝した。

若々しい顔が正殿前に居並んでいる。希望に満ち溢れたその眼差が清純に光っている。

願わくは成人諸君、己れの弱い心に負けずに堂々と進んでいただきたい。これからの人生を立派に生き抜く為に、自らを鍛錬する心を培っていただきたい。鍛えた鍛え抜いた心身を以て、勇気をもって世の荒波を乗り越えていただきたい。これを心からお願いする。

寒風の中で
マラソン大会

去る一月十七日、恒例の宗像郡マラソン大会が挙行された。

当日は暖い日射しではあったが玄海の風は冷たかった。

参加者は百三十六名、十五日の成人祭を記念して毎年行われる行事で主催は郡陸上競技連盟と郡青年団協議会で、当大社の後援であった。

丁度日曜日で、境内は参拝の車で混雑していたが、その間を縫って選手団はスタートした。

コースは宗像大社楼門前より牟田尻―神湊―勝浦で折返し約十粁で、中学の部、高校の部、青年の部、一般学生の部、一万米の部の各種に分けられ、各部で若い男女が寒風の中を健脚を競った。沿道には小山の人々が出て、選手の健斗をたたえて拍手を送った。

(一頁よりつづく)

吉田占部由久

夜をこめて初詣する車の灯参道は光の波流れ止まずも

東郷有吉春子

厨より愛でし四つ竈いつしかに家建ち初めて見えぬが淋し

小倉大和虎雄

ダム建設補償目当ての新部落よりの雨降りて流れよ

東郷藤崎辰子

身一つを老人ホームの寝台にいくとせ春を待ち給ふや君

東京林まつえ

喜寿までを米寿までも延長し今朝は寝どこをけりて起きにき

福岡花田千代子

銀婚の時を迎へて思ふこと漏洩もありきヒリピンもありき

津屋崎麦野時雄

久保宮司によりて元建ゆめに見しわが大代神の霊物館なり

深田中野節子

なんとなくお頂きぬこの一年共に歩みし我が家計簿を

村山田金丸柳蔵

初雪の溶けて落ちくる雨れに首をすくめて軒をくぐりぬ

東郷藤田信子

尚しばし目覚めしまに床にありサラリーマンの一日のおごり

武丸立石昇

勝ち敗けは人世の常と晴々と百日の空を仰ぐ朝なり

吉武原田松代

約束の庭木の剪定もせず孫等との休みをアルバイトに行く

〃原田リノ

正月を指折り待ちし子どもらお出でこずひそかに淫れてゆく里

宮田北原きみ子

残業に彼更け帰らむ子を待ちて炬燵の炭を幾度もつぐ

田島小野迪夫

赤々と燃ゆる庭燎の明り受けて初詣での人ら寄時を待ち居り

門司久保晴

そらの道吾羽ばかりの鶴舞へりこころころと呼び応ふる

朝町井上陽之助

ふくるまでテレビのしらべ聞こえしがいつしか寒路さめて元旦

香椎織田橡雨

いにしへのてぶりゆかしも運飾り祖国日本のならひなればや

(外国を真似る習俗におもふ)

武丸立石ろせ

五日の旅ことなく終へし安らぎに車窓により街の灯を見る

名島久保房江

賀状よむ未っ子の手のたどたどしふと目にとまる静かなる朝

田島白雲山人

敗れたる戦の痛手癒ゆる迄や待たれし星居今ぞ建ち初む

宗像伝説　其の四十六
丸二屋橋

宗像郡神湊に丸二屋という商家があり、当主を代々三之丞と云った。この家は県代にわたって慈善事業を続け、近隣には今に至る迄その遺徳が語りつがれている。

十四代目の三之丞良助は、前代の三之丞良那に劣らず劣らずの、津屋崎の佐治徳左衛門の四男から入籍して家督を継いだ人であった。この人が実によく出来た人で、「宗像郡誌」には資性温厚、親につかえて孝、人に対して慈、常に家業に精励し家運益繁栄に趨き、屡金品を官に納めて、以て国恩の万一に報い、居村神湊は漁業者多く、冬季風波数旬に及ぶ時は、衣類は勿論鍋釜の如きものに至る迄、質物として糊口の料となし、生活の状態誠に惨憺たる光景なり。慈善深き翁は、其状を視るに忍びず毎次金穀酒の粕などを恵みて救恤し、善行の賞れ四境に高く、官庁に達し、屡褒賞を賜わりしのみならず、藩主より「善行の者」と書せる木札を下賜せられ、藩主江戸参勤上下行に当り之を建て送迎をなす。

云々と見えている。ために「郷長」の格を与えられた程であった。

彼は特に神を敬い、仏を信じて敬拝を怠ることがなかった。また、閑暇を得ては荒地をひらいて田畑を作り、勤労の尊さを世人に示した。

賽銭に捧げた銭が残っている。「喜わるるも厄うも、深きにしのあればこそ、こころにただあらされば、うみの親子にとならめ」

彼は安政五年十一月廿九日に卒した。

十五代三之丞の良直は、先代にも勝る篤行家であった。毎年、年末には必ず村内の窮民を調査して年越米を恵んだ。文政元年から明治十七年に至る四十年の長い間、三之丞三代にわたってこれが続けられた。特に孝心深く、父君五十才の時に父君の木像を造らせた。父君の歿後はその木像に対して、生ける人に仕えるごとくに、四時の服を換え、毎朝の食事をさげて拝した。彼は明治二年十月二十四日卒した。

その木像は、いま神湊の隣船寺にある。「善行者」の木札が傍に立てかけられ、輝管、筆が置かれている。現代宗彼禅師が今も朝夕の供養を続けている。

十五代目には特筆すべき善行があった。今の宗像町熊吉古森橋が木完全であったので、私財を投じて土橋を架設した。後に明治三十一年九月に十六代目がこれを石橋に改架した。今に「丸二屋橋」という。

十六才三之丞の良定は、これ亦父祖の名をはずかしめなかった。

郡誌によれば、貧しい漁民に蚊帳が無いので、五十張余を貸し与えた。(明治十五年)やってしまうと質に入れてしまうので、秋には返納させた。明治十七年の夏には百五十張に及んだという。その年は水害と不漁のため、村内に米三十五俵、粟五十余俵を施した。それらを、下男をして貧家の軒先まで運ばせたと伝えられている。この善行が知れ渡らない。明治八年と十八年には福岡県より表彰されている。

ここに一つ、丸二屋の善行が欠けている。

それは、丸二屋橋も近代的なコンクリート橋に架け替えられた。そして、往時のいわれを知らぬ県側は「何とか橋」と改称しようとの話があった。これを聞いた隣船寺の和尚さんが憤慨した。

「そけなこつがあるもんか」

和尚さんは県庁まで乗り込んで一席ぶった。橋名は開もなく旧名に戻った。

今は世の中も往来する交通機関も遥っているが、心ある人の心づかいによって、そのかみの「丸二屋橋」の名は、永久に伝えられるであろう。

(H)

宗像大社献詠俳句作品集(七)

津屋崎　井浦　良介
冬海へ重心低く鳥翅たす

〃　勝田　光一
雪を積む荷車が行く朝日の坂

〃　岩見佳代子
夜廻りの声に消す吹雪の灯

〃　鶴　美津男
菊まぶし駅伝走者着くを待つ

〃　毛利　夜潮
海よりのお降りぬくく禽舎に降る

〃　西住喜三部
夜気やはし人に押されて破魔矢受く

〃　白石百合蔵
旧病舎に囀えもどる寒雀

〃　篠原　登九
漆黒の径寒木瓜に踏みはずす

〃　占部　河童
小漁村の雪積む舟の舟溜り

〃　吉野　享志
愛燦の像雪で描いて未知の坂

〃　溢田しげを
元旦の誓い背広に拓し着る

〃　安部真佐子
雪はりつく窓拭く車掌の長い髪

〃　香立喜一郎
雪灯を提げて巡視に来る警官

東郷　小野　淡坡
追ひ羽根の垣にとまりて路地深し

日立と共に五十年

倉田主税会長の半生記 (九)

人間は五十を過ぎると十才や、十五才の年令の違いは大した問題でなくなるが、二十代から、三、四十代にかけては五つ違っても大変なものである。知識、体験の両面に於いて、かなりのハンディキャップがあるのが普通である。二十四才の主税にとっては、三十九才の小平は完全に〃仰ぐべき師〃であった。勿論学問的なことを論じても、高工を卒業したばかりの主税の歯が立つ訳はなかった。既に三人の子持ちである小平は人生の現実についても立派な師匠であった。それにもまして彼は主税達新入社員に対する〃技術者としての恩師〃であった。主税が次第に出世して係長となり、部長となり、或は工場長として多くの後進を指導し、育成したことは、まぎれもない事実であるが、彼によって才能を伸ばされ、然るべきポストに就くことを得た人達は、口をそろえて彼の〃教育者としての力〃を称えるのである。彼の薫陶を受けた者は、いずれも彼の優れた指導的能力を認めている。主税が生来的にそういう素質を持っていた――とは簡単に測定できない。小学校から小倉工業まで、一貫して彼が級長をつとめたことは事実であるが、それを以て、彼が生来的の指導者、或は教育者たる証拠にはなるまい。学業成績の良いことは決して本人の性質や、性格に直結しない場合が多いからだ。思うにそれは小平の感化によるものではあるまいか。ということは、小平自身が立派な指導者であり、後進に対する無二の教育者であったということだ。人を教え、導いてその持てる才能を十二分に引き出し、発揮させるのが教育者の本質とするならば、小平はまさに真の教育を施し得る稀有の教育者であったと言える。だから主税達若い学校出の技術者達にとり、日立製作所というものは〃教育の場〃であったのだ。小平学校という訳だ。校長として小平はあらん限りの力を傾けて後進者達を教えたのである。血の通った指導を与えたのである。勿論彼がそうして人材の養成に懸命であったことは、自分の創めた事業――電気機械製作事業を発展させ、大成させる為に必要と考えたからであろう。然しもっと根本的に日本という国家の産業を興隆し、国力を充実させようとする熱烈なる愛国の精神があったに違いない。更に、素質のある青少年を指導し、教育して、立派な技術者たらしめんとする切々とした人間愛が小平の心の奥底に常に流れていたことは、絶対に否定出来ないであろう。一にも人、二にも人、当時の彼は人物の獲得人材の発見、養成に夜も日もなかったように思われる。その熱意と、その真情が次第に花を咲かせ、実をつけたのが、後に於ける日立製作所の発展にほかならない。

その頃世間一般に大学卒業者と専門学校出身者とでは、採用の時の初任給がひどく違っていた。日立製作所でも、大学生の月給が七十円なのに対し、高等工業出は二十五円であった。まさに半分以下だ。現在、大学学部卒業者と短大卒業者とは、それ程の差別待遇はされないようであるが、昔はこれが当然とされていたのだ。スタートでこれだけ開くと、とうてい追いつけるものではない。それどころではなく、入社後の昇給率が中等学校出、専門学校出、大学出と全く別なのである。勿論後者ほど率が良いのである。しかも行きつくところも大体きまっていた。中等出は係長どまり、専門出は課長、稀に部長になれる者もいた。大学生は悪くても、課長までは必ず行き、大概は部長となり、多少成績の良い者は重役陣に加わることが出来た。従って専門学校を出て来た者は、どうしても大学出身者に対して劣等感を免れなかった。劣等感に悩まされないにしても、現実の給与の差には、しばしば苦い思いをするのであった。釈然としない気持は常に心の底にへばりついて離れなかった。「下らないからやめる」「もっと差別のないところへ行こう」こう言って専門学校出身者は一人やめ、二人やめて行った。彼等は高工出身者の前途を見限ったのだ。同僚の誰彼が職場を去って行くのを主税はじっと見送っていた。こう書くと、如何にも彼が超然として浮世のことを見下ろしていたように思われるが、そうではない。彼とても赤い血の流れる血気の青年である。野心もあれば希望も持っている。立身出世も諦めて、只管己れの仕事に没頭するだけの悟りを開いている訳ではなかった。主税も、やはりこの問題では悩んでいる。旧学友の一人と話をする時は、何時もこのことが話題に出ないことはなかった。然し彼はそれ以外の人間に待遇の不平を洩らすことはしなかった。不当とは思った。不合理とも考えた。然し彼はそれを第三者に語ろうとはしなかったのである。又、その不平を根にもって仕事を怠るということも絶対にしなかった。怠けないのは几帳面な彼の性格が然らしめたものである。月給が多くても、少なくても、与えられた仕事をいい加減にすることは、自分自身に対して、出来ないのである。自律の精神であり、自責の観念である。然し折角知り合い、一緒に仕事をした仲間が次々に去って行くのを見る時、主税はやはり一沫の悲哀を禁じ得なかった。少なくとも無関心で見送ったり、殊更冷然と別れることは出来なかった。

入社した年の五月、主税は徴兵検査を受け、見事甲種合格となった。そしてその年の暮、十二月に下ノ関重砲聯隊に一年志願兵として入営した。一年志願というのは、特に中等学校以上の卒業者に限って認められた制度で、要するに幹部養成の為のものである。当時、現役で入営する者は三年間在営しなければならなかった。そして除隊の時の階級は一等兵が普通で、余程優秀な者でないと上等兵にはして貰えなかった。ところが、一年志願兵ではいると、僅か一年の在営で除隊の時は軍曹に昇進でき、更に二年続けて三カ月づつの召集を受けたのち、陸軍少尉に任官することが出来た。たとえ少尉でも、将校は将校である。昔の軍隊というところでは、将校は神さまのような存在であった。だから〃教育のある〃人間はたいがい一年志願兵となり、予備役将校になるコースを選んだ。そのかわり、一年間の在営に対して百余円の被服食糧費を納めるのである。考えてみると、封建色豊かな明治、大正期の我が国で、費用自弁の兵役というものが制度として存在したのも妙な話である。

あゝ常陸丸 (六)

聯隊本部及び第二大隊及び第十師団の糧食縦列を搭載して下関を出港、明治三十七年六月十五日玄界灘を航行中の処、午前十時頃沖ノ島附近に於て敵艦「ロシヤ号」「グロムボイ号」「リュウリック号」の三隻を濃霧の中に発見した。監督将校海軍中佐山村弥四郎は船長を督励して逸走を図った。次で万一を慮って秘密書類を焼却した。一方敵艦は直ちに砲撃を開始した。

執拗なる砲乱撃が続いた。船中は忽ち阿鼻叫喚の巷と化した。山村中佐も敵弾の為に斃れた。これを見た英人船長ジョン・カンデルは山村中佐の遺志を継いで一意逸走を図ったが、彼も亦機関長ゼーチス・エッチグラス、一等運転士エス・ジェー・ビジョップ等と共に敵弾によって戦死を遂げた。

かくするうちに敵艦は咫尺の間に迫った。輸送指揮官須知中佐は自らも負傷、今は手の施しようもないのを悟り、先ず聯隊旗手大久保少尉をして軍旗を焼却せしめた。この軍旗焼亡の火の消えやらぬうちに須知中佐以下の将校は各々の軍刀を以て割腹を遂げたのである。

その間にも敵の集中弾は愈々激しく、午後三時頃には機関部及びその後方より火を発し船尾より沈没してしまった。

時に風雨ますます吹き荒れて波浪高く、暗憺たる海上にわずかばかりの生き残りが漂っていた。その頃唯一隻の漁船が近付いて来た。乗組員三十七名を救助したが荒海のため航行思うにまかせず、翌十六日午後二時頃に漸く門司港に到着することができた。同日この惨状は沖ノ島の望楼からは手にとるように見えたという。

沖ノ島連絡の御用船は何の役にも立たず、旗をあげる信号柱のほかには電信も電話もなく、何等危急を救う手だてもなく、この成り行きを目前にしながら切歯扼腕、悲憤の涙を流すばかりであった。漂着した百名ばかりの兵卒が沖ノ島で救助されたのみであった。

このことを、何も知らない筑前沿岸の漁村では夕立の遠雷と思い、西方の雷鳴は烏賊鯖の大漁の前兆とはしゃいでいる者もあった。この夕刻、この遭難から漸く逃避した日の丸、金沢丸の二艘が神湊に辿り着いて急報したので、それから大騒ぎになった。筑前沿岸には直ちに非常令が発せられ、全漁村、総動員で救助に出動。約百名を救助した。沖の島には、その痛恨事以後、逓信防備の施設の必要に迫られ、下関より沖島、対馬の厳原間に海底電信が敷設され、電信固定局として海軍の兵舎側に宿舎事務室の増設を見るに至った。これが後程、大海戦の当日、三百六十余通の戦況電報を打電することになる。それはさておき、この事件を伝え聞いた国民の悲憤は最高潮に達した。

「敵の浦塩艦隊突如として対馬海峡附近に現わる。」

「敵艦は我が輸送船を撃沈す」の警報が発せられた時には既に常陸丸は沈没していたのである。因みにその時の砲声は東は下関、西は佐賀に聞こえたといわれる。

この事件を契機として、海軍は上村艦隊をして、敵艦捕捉の為に捜索せしめている。上村司令長官は隷下艦隊に次のような訓令を発した。

此行必ず敵醜を滅さずむば止まず、各艦敵に会わせば、砲弾を尽して奮闘す可し。予亦時に依りては自ら、砲手となり以て健闘する所あらむとす。諸子予が意を諒とせよ。

その時の索敵は四昼夜も続いた。しかし悪天候に遮られて遂に敵艦を捕捉するには至らなかった。即ち、

一、六月十五日、午前八時、哨艦「対馬」の無線電信によって〃敵艦隊は沖ノ島附近に現われ、南方に航行す〃という情報を知り、東郷司令長官の聯合艦〇海里の地点に来て始めて敵艦が北海道方面に姿を現わしたことを知り、ここに四昼夜にわたる索敵行動を断念せざるを得なかったのであった。

(以下次号)

わが半生の記 魚屋五十年 (二)

和田弥市

大正五年小倉聯隊に入営。大正六、七年青島守備。大正八年シベリヤ出征。大正八年八月十四日満期除隊。同時に八幡製鉄入所。副業として魚の行商。昼勤の日には四－五時間、夜勤の日は十時間の行商をしました。寝る時間は五時間位だったでしょう。十年間の貯えを元手に、八幡の一流場所西本町四丁目に店を持ちました。間口四間五尺、奥行十四間、二階六畳間十四室のアパートで、これを家賃三百円で借りました。

借家の時、日鉄の瓦工さんがあの大きな家を借りて何をなさいますかと、家主は半信半疑で相手にしませんでしたが、五六回行きました。丁度その前日小倉の或る大会社の社長と秘書の二人が借家の申込みをしたそうです。しかし私は臆せずに申しました。

「一瓦工でも誠意を以てやれば何事も出来ます。この家は少し狭いが我慢しましょう。昨日申し込んだ大会社が必ず良いとは決っておりません。要は、間違いなく家賃を支払うことが第一でしょう。私は死んでも家賃を支払いますよ」と強く、大風呂敷を広げて申しました処、何と考えられたか、私に貸してくれました。その家主さんの御恩も忘れられません。又、登記所に行った時も、書類が三通要りますが、私は申しました。

「二通にして下さい。要は間違いなく支払うことでしょう。登記の内容も読む必要はありません」

この言葉は家主の渡辺さんが大変お気に入り、ほめられた事も一生忘れられません。

家賃は、必ず納期の二日前に持参致しました。何事も誠意です。二年目に、私が言わぬのに家主さんが家賃を二百七十円にまけてくれました。そのほか、古い扇風機を二台、店用として無料で下さいました。私は感激いたしました。何という立派な家主さんでしょうか。家主さんの奥さんが私のことを大層信用されたということを後になって聞きました。

一方、その頃に私は製鉄所の高等学校に入学、二カ年で卒業しました。昔の小学校出の分数も分らぬ老人が、始めから二元一次式、二年目は三角法、無理に詰め込まれた時は、今の小中学生の本を借りて勉強しました。本当に手も足も出ないとは此のことだったでしょう。しかし本科、冶金、鋼鉄加工、熱処理、化学、電気機械等を脇目もふらずにやり通しました。四十三才の手習いでしたが、「何事もなせばなる」の一念でやり通しました。昭和十二年頃のことでした。

さて、借家した家の運営は、先ずこの家の間口二間を「和田楽器店」、間口二間五尺奥行十間を「大食堂と鮨店」として開業。使用人は十人でした。

私は日鉄社員としてアパート、楽器店、食堂と、四カ所の収入で生活も安定。ところが喜ぶのも束の間、昭和十九年八月八日の大空襲ですべてを失いました。

(つづく)

我楽苦多告知板

〇大晦日徹夜用に瓶入りの栄養剤を支給した。若い人がその空瓶にお茶、コーヒー、お屠蘇、酒を調合したところ、知らずに呑んだN君俄然ハッスル。これを見た若い人等「値段の高い栄養剤よりも自家製の方が利くのかなあ」首をひねったり感心したり。

〇毎週土曜日に職員の誰かが大島小学校に剣道指導に行く。つい此の間、O君とS君が行った時のことである。神湊で、バスから降りると、一人の男が近付いた。

「あなた方、釣りでしょう。舟を出しましょうか」

「いや、これは剣道の竹刀袋だよ。釣りじゃない」

「いや、私は商売人だが、どう見てもあなた方は魚釣りに来たとしか見えない。かくさなくてもいいですよ」

執拗に云う男に、S君目を白黒して「何とでも云え」

占いコーナー

昭和40年度の運勢

自40年2月4日
至41年2月3日

★一白の人
(明24、33、42、大7、昭2、11、20年生)

比較的金運にめぐまれる歳、昨年新規事業、新築の人出費あり。物事を決定し計画を新にする事あり、長上、知友の面よし。人にたのまれ融資亦は投資容易に戻らず印判保証厳に戒しむ。

★二黒の人
(明23、32、41、大6、15、昭10、19年生)

物事改革を思い立ち。新規商売をもくろむ事あり、従来の業を固く守り、努力新しき事に心して進まぬが吉。悪友の誘に乗るな、神仏を篤く敬いおかげの日々を暮せ。

★三碧の人
(明22、31、40、大5、14、昭9、18年生)

華より実をもとめよ、礼は和の大要也。礼を正すことにより争い親しき友の離別をも避け得る。裁判我に勝算有れど、この一年示談とせよ。「けちな心起り」て自衛となるか思慮をかき無茶な行動に出ること有り。勝負事、勤務先の変更此の一年忍び時機を待て。

★四緑の人
(明21、30、39、大4、13、昭8、17年生)

突発的に争い事に巻込まれる暗示ある年、他人に相談事持込まるゝこともあり、仲裁事も注意、智をしぼる事あり物事のはかどらぬこともあり辛棒せよ。運気は守備態勢にして積極の時ならず、若い男女縁談は本年さけるが賢明也。

★五黄の人
(明20、29、38、大3、12、昭7、16年生)

運気順調にして物事の決定、財福の運あり、他よりほめられる事依頼事有り。身辺を平和安泰の気に自ら包み前后忘却眼前一歩、新運命に向うが智明なり、労して有る年。

★六白の人
(明19、28、37、大2、11、昭6、15年生)

昨年は今一歩の処で弾つき矢折れしといった事を辿ったが今年は財福共に来る、小心と野望の交々動きて自からを去就に迷わしむ、誠実以外に策無し、火難有り保険に入るも一法なり。

★七赤の人
(明18、27、36、大1、10、昭5、14年生)

本年は身心両面より豊かにより健康になる、真に順調心配なき年、反面板ばさみの事か情実のなやみ有り、のびくの事がはかどらぬ事問題に手焼くこと有り失費事も有り、神仏の守護を信じ、一家の円満をはかれ。誠実第一何事も腹一つにおさめる事。未婚者縁談は整う。

★八白の人
(明17、26、35、44、大9、昭4、13年生)

新築、新目的への投資は后日の災を招く旧を守り、入るをはかり出するを利すべし過去の方罪なき人本年も順調、過去に本命の方罪をおかせし人進まんとしてはかどらず、焦心しきりに動きて不満病魔多からん。いたずらに小心になる勿れ、運勢を整えるが如き年作用なり。